

#### 4. 1 1年次研究開発計画

研究内容	研究方法	研究評価方法
<p>①読むことの段階的指導—インプット量の確保と速読練習</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時のアンケート結果から、どんな文章に対しても同じ読み方しかできない生徒に、読み方を工夫するよう予習方法と合わせて指導していく。</li> <li>・英語科教員同士、あるいは他教科の教員による英語授業の参観や評価を行い英語授業改善のアイデアを集める。</li> <li>・読解力をつけさせるため、他教科と連携をとりながら背景知識を与える。</li> <li>・副教材により、英文の読書量を増やし読書速度をあげる指導を行う</li> <li>・英語 I において、意見交換などを行うことによって理解度や定着度を高める指導を行う。</li> <li>・教科書の文章スタイルに合わせて、読解スキルを少しずつ指導する。</li> <li>・パラグラフの基本の把握に基づく読解指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期考査で読解力を評価する。 (年5回、絶対・相対評価)</li> <li>・GTECによりreadingの評価を行う(4月・12月)</li> <li>・課ごとのプレ・ポストテスト(絶対評価)</li> <li>・英検準2級テスト(4月・9月・1月)</li> <li>・英語科教員や他教科の教員の授業の変化を自己評価及び相互評価する。</li> <li>・研究対象生徒(普通科)の学習に取り組む姿勢を観察評価する。1</li> <li>・アンケートによる自己評価を行う。</li> <li>・授業改善事例集の自己評価をする。</li> <li>・外部英語教員や生徒・保護者のアンケートにより評価する。</li> <li>・研究対象生徒(普通科)の学習取り組み状況や読書量と速読力伸長度をポートフォリオで評価する。</li> </ul>
<p>②CALL教材使用を中心とした聞き取ることの段階的指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・listeningの習慣を身につけさせるため、学習記録等で自己評価をする指導を行う。</li> <li>・CALL教材・日本人教師・ネイティブ教師・生徒同士の学習活動を有機的に結びつけるCELL(Computer Enhanced Language Learning)環境を構築する。</li> <li>・オーラルコミュニケーション I (OC1)と英語 I において、スキット等の活動を行い理解度と定着度を高める指導を行う。</li> <li>・英語科教員同士、あるいは他教科の教員による英語授業の参観や評価を行い英語授業改善のアイデアを集める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究対象生徒(普通科)の学習取り組み状況やlistening量をポートフォリオで評価する。</li> <li>・研究対象生徒(普通科)の学習に取り組む姿勢を観察評価する。</li> <li>・研究対象生徒(普通科)の表現活動を観察評価する。</li> <li>・調査及びGTECによるlisteningの評価を行う。</li> <li>・アンケートによる自己評価をする。</li> <li>・授業内テストでlistening力を評価する。</li> <li>・授業改善事例集の自己評価をする。</li> <li>・外部英語教員や生徒・保護者のアンケートにより評価する。</li> </ul>
<p>③読んだり聞いたりした内容を要約したりそれに対する自分の考えをまとめたりすることの指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネイティブ教師との連携により少人数制クラスを設定し、書く・話す活動の機会を増やした指導を行う。</li> <li>・英語 I とOC I において科目間の関連を持たせることによって効率的に表現力をつける指導を行う。</li> <li>・ペアワークやグループワークの手法を用い、書く・話す活動の機会を多く設定し思考力や創造力を表現力に結びつける指導を行う。</li> <li>・英語科教員同士、あるいは他教科の教員による英語授業の参観や評価を行い英語授業改善のアイデアを集める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究対象生徒(普通科)の表現活動を観点別評価する。</li> <li>・スキットコンテスト等のパフォーマンステストで評価する。</li> <li>・GTECによるwritingの評価をする。</li> <li>・アンケートによる自己評価を行う。</li> <li>・定期考査で表現力を評価する。</li> <li>・授業改善事例集の自己評価をする。</li> <li>・外部英語教員や生徒・保護者のアンケートにより評価する。</li> </ul>

## 稲毛高校の考える読解力・聴解力とは？

パラグラフの理解を通して、筆者・話者の主張を理解するため、「概要を捉え、語彙・文法・指示語・文と文の連結など細部まで正確に理解し、筆者や話者の気持ちなど、文字や音声に現れていない部分も含めて深く理解する力」を指す。

## その読解力・聴解力をつけるための授業は？

	1年次(英語Ⅰ・OCⅠ)	2年次(英語Ⅱ・ライテ)	3年次(リーデ・ライテ)
文・文章	多量に	正確に	深く
パラグラフ指導	基本構成	基本展開法	その他の展開法

## 研究内容（1年目）

### ①ー1 インプット量確保のための教科書指導

#### 1 「早く正確に！」はトップダウンとボトムアップで

##### トップダウン

トップダウンとは知らない単語等があっても、内容に関する知識から、或いは前後関係から意味を予測し、文章全体を理解しようとする読み方である。「読む」ことに加え、同時に「聞く」こともこの手法で可能である。

##### ボトムアップ

ボトムアップとは個々の単語の意味や構文を確認してから、文章の内容を理解するという読み方である。文法事項はこの段階で指導する。語彙や構文を確認した後で、読み理解を深めていくことになる。

#### 2 「パラグラフの理解」——なぜ「パラグラフの理解」なのか？

『クリティカル・シンキングと教育』（鈴木健・大井恭子・竹前丈夫著）には、パラグラフ・リーディングに関して以下のように述べられている。（76,77 頁より引用）

文章を読む時にもっとも大切なのは、一語一語の意味を追うのではなく、文章を読みとること（reading thoughts）である。言葉の意味を一つ一つ追うような読み方では、文章全体の理解もむずかしく、スピードもいっこうに上がらない。つまり “You cannot see the forest for the trees.” ではダメなのである。

特に英文を読む時には、パラグラフ・リーディングの技術を身につけておく必要がある。一つ一つのパラグラフこそが、書き手のアイディアの単位なのである。逆に言えば、わからない語が文中にあっても、key word でない限り気にする必要はなく、各パラグラフのポイントを読みとることのほうが大切である。

通常、英文の各パラグラフは一つのアイディアを含んでおり、全体の構成に応じた目的を持っている。それぞれのパラグラフには、トピック・センテンス(topic sentence)があって、展開される内容の提示がなされている。

本校では従来、1文1文を和訳する力がつけば、それが英文を理解する力になると教員が見る傾向が見られた。しかし筆者の主張(topic sentence)は、いくつかの文が集まってできた (as a group of sentences) パラグラフの中で述べられており、1つの文を読んだだけでは読みとることはできない。そして、筆者の主張を理解するためには、パラグラフとは何なのかを理解する必要がある。本校では、概要を掴む際、そして精読指導後にまとめをする際にパラグラフに視点を置いた読み方が有効であると仮定した。

## ①—2インプット量確保と速く読むための速読指導

### 速読教材を用いる利点

- 1 速く正確に英文を読む力をつけることができる。
- 2 多くの英文を読む力をつけることができる。
- 3 日本語訳を考えながら読まずに、前から意味のまとまりごとに意味をとって読むことができる。
- 4 教科書に関連したトピックを読むことによって、既習の事項をより深く理解することができる。
- 5 学習結果を速読表・速読テスト・GTEC等によって、客観的に分析し診断評価ができる。

本研究で導入した速読教材は、各教員が本校で使用している教科書以外の英語 I の教科書、或いは問題集等から抜粋したものより 100 語～200 語程度の英文を持ち寄り、それに 5 問程度の問題を付けて速読問題として用いている。3 分程度で解答できる内容にしてある。生徒は自分の解答に要した時間を用紙に書き込む。解答時間終了後、答え合わせを行い「ワード数÷所要時間×60×解答正当率」で数値を割り出し、速読表に記入し各回ごとに記録を残していく。この活動は教科書精読において重点をおいた読解スキルの応用練習という意味合いも含んでいる。

## ②正確に聞き取ることの段階的指導

### CALL 教室の活用&デュアルティーチング

本研究で導入したCALL教材は、文京学院大学外国語学部教授（千葉大学名誉教授）の竹蓋幸生先生が中心となり、文部科学省科学研究費を得て開発した listening 学習教材である。CALL教材の利点として以下の5つがあげられる。

- 1 実際に言語が使用される場面。映像・音声・文字で再現し、言語使用の擬似体験ができる。
- 2 生徒は個別に自分のペースで学習できる。
- 3 反復作業が容易で、自立的学習ができるように支援することができる。
- 4 教授品質を一定に保つことができる。
- 5 学習結果を客観的に分析し診断評価ができる。

また、本校では『オーラル・コミュニケーション I』（ネイティブ教師単独授業）を行っており、その利点として次の4点があげられる。

- 1 英語を英語で理解する機会が増える。
- 2 異文化に直接触れる。
- 3 疑似体験ではなく実際の言語使用
- 4 listening の機会が増える。

## ③読んだり聞いたりした内容を表現する指導

### 稲毛高校の表現活動はこれだ！

英語 I では、各課の終わりに本文の内容をフローチャートでまとめさせ、それを基にして自分の意見を書かせることにしている。さらに、書いた自分の意見を口頭で発表する方法として、ペアワークやグループワークをさせている。内容を整理するフローチャートを作成することによって、図形（チャート）の流れ（フロー）により、話の内容を論理的に整理することができるため、表現活動につながりやすい。

スキットコンテスト（グループプレゼンテーション）

オーラル・コミュニケーション I の授業では、CALL教材と両方を照らし合わせて、共通内容を中心にアウトプットへつなげる活動に重点を置いて、スキットコンテストを実施した。これは5～6名のグループごとに、授業中に扱ったトピック・語彙・文法事項等を用いつつ自分たち自身でスキットを作り、ネイティブ教師がそれをチェックし、演技の練習をし、当日はクラス全体を前にしてステージ上で演じた。

評価はネイティブ教師とクラスメートが予め提示された評価基準によって行った。

## 研究開発評価の分析（1年目）

4月と12月に総合的な英語コミュニケーション能力を測るためにGTEC (Reading, Listening, Writing)を受験させた。このテストは全国的に数多くの高校生が受験し、高校生が国際交流などで遭遇しうる場面が言語材料として題材となっているものである。したがって本校生徒のコミュニケーション能力を相対的に測るために適していると判断した。Totalではある程度の伸長が認められたが、Readingはわずかな伸びにとどまった。これには次の2つの理由が考えられる。

1 量に重点を置いた指導であったため、正確さという点での定着があまりされなかった。

2 入学時に、listening や writing に比べ最初から reading の成績が高かった。

来年度は、4技能において正確さ、特に文法と語彙に力を入れて指導していく。writing は英語 I の各課のまとめにおいてパラグラフィティングを毎回指導したため、量に関しては入学時に比べて多く書けるようになったと言えるだろう。listening は、CALL 教材を中心に指導したため定着が図れた。今年度の量を求めた指導に対し、来年度は質、つまり正確さを求めた指導に重点を置きたい。

GTEC は相対評価としては良いテストであるが、本校の授業で教えた個々の下位目標の達成度を測ることはできない。個々の活動の評価としては、定期考査を始め各種小テストや発表、ポートフォリオなどを用いた。